

漢法苞徳塾資料	No. 186
区分	診察論・脈診
タイトル	代表的な種々の脈診について
著者	八木素萌
作成日	1992.05.15

◎経脈別の脈診については『難経』一難の記述に見られるものであるが、具体的には伝えられていない。注釈者によって脈診の部位に関して、やや異なっている。診察部位での脈の虚実に関しては経脈機能を反映すると解されているかの如くである。この点は『素問』三部九候論第 20 の記述からも察せられる。

◎身体を三部に区分し、各部分には天・人・地を配して脈診する方法で『素問』三部九候論第 20 に記述されている。

顔面部の天＝上額（額厭）の脈で頭角の気、人＝耳前の脈（和髎・耳門）で耳目の気、地＝両頬の脈（大迎〈太素・卷十四にある註〉・巨髎〈王冰の註〉・地倉〈類経の註〉）で口齒の気を候がう。

中部は手腕部で、天＝手太陰〈経渠〉で肺の気、人＝手少陰〈神門〉で心の気、地＝手陽明〈合谷〉で胸中の気を候がう。

下部は足脚の諸部で、天＝足厥陰（五里・太衝〈王冰の註では女子の場合太衝〉）で肝の気を候がう、人＝足太陰（箕門）で脾胃の気、地＝足少陰（太溪）で腎の気を候がう、として診察している。

所謂『素問の三部九候』脈診法である。

◎脈口の脈法、

1. 『素問』の脈法

『脈要精微論第 17』『平人氣象論第 18』『玉機真藏論第 19』等に見られる各種の脈診法である。橈骨茎状突起部の脈拍の拍動部で脈診をする方法である。

『脈要精微論第 17』には長・短・数・大・上盛・下盛・代・細・濡・湧泉・弦絶という脈状の病症的な意味を記述し、また、五臓の脈状と胃の脈状が詳論されている。

『平人氣象論第 18』には平人の脈象・脈象と胃の気との関係、五臓の平脈・病脈・死脈について論じ、また、五臓の脈象と四時の関係やその順逆の判断について論じ、さらに、寸口診（脈診のこと）と尺皮診について記述し、これらに関連する病証を記述している。

『玉機真藏論第 19』には、四時における五臓の脈状の平脈・大過脈・不及脈の変化、真藏脈の脈象、また、脈象が四時に逆らう場合と、五実・五虚の症候を記述し、予後を論じている。ま

た、四診法の相関性や位置付けの問題を論じている。

つまり、『素問』流の上部天人地・中部天人地・下部天人地の「三部九候」脈診と、寸口（脈口とも言う）脈診の数種が記述されているのである。

2. 『靈樞』の脈法

脈口と人迎（頸動脈拍動部）の部位を比較脈診によって変動経を判断する方法であるが伝承されなかった。

3. 『難経』の脈法

「気口」脈法であり『史記』に「脈は扁鵲に始まる」と記述されているように後世の脈診法に深刻な影響を残している方法である。『18難』の前段には、左右に三陰三陽を配分することが記述されている。この配分に関しては解釈が多様に別れていて定説と考えられるものは無い。臓腑を配当しているものと解釈する者や、経脈の配当であると解釈する者もある。『難経』の記述形式から考えれば経脈の配当であると見なすのが適切であろう。また、上・中・下の三部においても、浮・中・沈の脈を診る。脈状を診て、病臓と病因を診断し、また、病状と病の順逆を判断している。

「経絡治療学派」の大きな影響の為であるが、『難経』の脈法を「三部九候脈法」と呼び、三部左右の脈を「浮沈・虚実」の「四脈」または更に「遅数」を加味した「六脈」に撮って、経脈的変動を、脈が虚している部はその経脈の虚と診、脈が実っている部位はその経脈が実であると診る、その判断結果に従って、「虚」している所には「補」し「実」っている所には「瀉」と言う、治療方式を行なっている。このような「三部九候脈法」は、『難経』に由来する方法であると、解釈する人々が少なくないが誤った言い方である。「経絡治療学派」の脈診は、左右を虚実を比較対照した判断を主としているので、「三部九候比較脈法」とか「六部定位比較脈法」などと、表現されている程である。

このような解釈の脈法を、『難経』脈法と言うのは、『難経』に対する冒涇であると強調して置かなければならない。『難経』脈法は、「経絡治療学派」の少なからぬ人々が言うような、平板で単純なものでは無い。

（三部左右への三陰三陽の配当に関する諸説は別図を参照のこと）

4. 『傷寒論』の脈法（「金匱要略」の脈論を含む）

気口脈診法で『難経』脈法に近似的である。しかし、用語は『難経』とは異なったものが少なくない。病証と脈状に関する記述は『難経』より詳しい。また『素問』熱論第31の三陰三陽の病証の記述をさらに詳しくした上それぞれの脈状を記述している（六経脈法とも言う）、「三陰三陽の病証に応ずる脈法の基本が確立された」と言ってよいだろう。さらに、足に「先天の気」と「後天の気」を候がう脈法（太溪脈～先天・と趺陽脈～後天）が加わっている。三陰三陽と五臓を診る脈法と表現できよう。

5. 『東垣の脈法』(左の脈口を人迎とし・右の脈口を氣口として、脈診)

『三因方』にも『診脈口伝集』(曲直瀬道三)にも記述されているもので、脈状と左右比較によって、病の性質や順逆を判断しようとする脈法である。井上雅文氏の『脈状診の研究』は、この方法を復活させたのみで無く発展させた。しかも、鍼灸治療に役立てられるものにした。

6. 『時珍の脈法』(奇経脈法)

『奇経八脈攷』に記述されたが難解である。しかし、その後、この脈法を解説した脈論が、少なからず表われて運用しやすいものとなった。「奇経」の変動を診る脈診法である。

◎「経絡治療」の「六部定位脈診」について

『難経』に基づいた脈診法であると考えられているが、むしろ『十八難』の配当に関する解釈の中の、一つの説の経脈配当を採用して援用したもので、「脈状」を、診察対象にしているとは言えない、これが「経絡治療」的脈診である。「証」概念が漢方古法派の「証」論からアイデアを援用して、日本鍼灸に独特の「証」観を創出したのが「経絡治療」の創案者達であるが、これと同じように、『難経』のある注釈者の配当説から援用した独自の創案である。このように言えるのは、脈状を重視するよりも、主に六部相互の間の強弱を比較して「証」の判定をするからである。

『難経』は、脈状を主とした脈法である。それは12祖脈を撮っている。
浮沈遅数太細長短虚実滑濇の12種類の脈状を診ている。陰陽分類と五臓分類の脈診である。